授業で読んだ文章を「言葉のもつ力」「言葉の可能性」を軸に整理してみると、次のようになるのではないでしょうか。

まず、「記号を使う動物」では、人間は言葉による「意味づけ（名前をつける）」という営みを通じて、未知のもの、関わりのなかったものを自らとの関連で捉え、自らの文化の世界の中に組み込もうとする、と述べられています。こうした行為は価値観の形成をはじめ、あらゆる文化的な営みに広く関わっており、そこに言葉の創造的な働き、言葉のもつ力を見ているわけです。

それに対して、「言葉への挑戦」は、身近なコミュニケーションのレベルから言葉の問題を論じたものです。そもそも言葉の意味、概念の詳細は人それぞれであり、意思疎通によって達成されているのは、あくまで外界の近似に過ぎないとしています。人はこうした言葉による意思疎通の限界性を理解しつつ、しかし「どんなことでも言語によって表現されうる、表現されえない部分は無視できるほど小さくできる、という仮定に立って無限の努力をしてゆく以外に方法はない」のだと、言葉に対する基本的なスタンスが提起されています。一見、悲観的な叙述、すなわち「言葉の不可能性」への言及にも見えますが、これは「言語ゲーム」へのリスペクトと捉えるべきだし、この主張を補うのが、同じくヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」論に触れ、言語への「信頼」の大切さを説く「懐疑をいかに乗り越えるか」です。

「赤ちゃんはＡＩより天才だ」において重要なのはもちろん、「記号接地」と「仮説形成推論（アブダクション）」という二つの概念です。前者は言語習得における言葉と身体ないしは経験の関連付けの重要性を、後者は「仮説形成推論（アブダクション）」がもつ知の創造性、言葉の可能性を説くものです。授業では自分たちで考えた新しい言葉として「しょっぽい」が出されましたが、音と意味との結合にどこか身体性が感じられて、日本語の文法体系に収まっているからだけでなく、言葉の身体性という面、つまり「記号接地」から考えても定着の可能性は大いにあると考えました。「仮説形成推論（アブダクション）」については「知の創造性」として捉えてみましたが、「記号を使う動物」で述べられている、言葉のよる意味づけの体系による「牢獄」化、あるいは「自動化」から解放し、

新たな体系への組みかえに関わる働きとして興味深いものがあります。文学、とくに詩歌の存在理由もこれに関わると思われます。

これは感想になりますが、教科書の文章は全体として、「文化と言語」、「コミュニケーションにおける言語」、「個における言語習得」というように、「大から小へ」という流れで配列されていて、論旨がつかみやすかったように思います。